

令和2年度 奈良市立朱雀こども園 研究実践概要

園長名 鈴木 優子

全園児数 222名

1. 研究主題 豊かな心を育み、主体的に活動出来る子どもを目指して
—ワクワク出来る遊びの環境を探る—

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

昨年の課題を踏まえ、今年度は子どもが自ら遊びを見つけ遊びを継続していける環境を探っていき、主体的に遊べる子どもを目指そうと話し合った。その為には乳児からの丁寧な関わりが不可欠であり、それが後の意欲につながると考える。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・乳児では、丁寧な保育を行うことがどういうことか共通理解し、環境設定を行う。
- ・幼児では、主体的に遊べるようになる為に、どのようなことが必要かを探り、取り組む。

②研究の重点

- ・園内公開保育を行い、子どもの姿から保育を振り返り明日の保育に繋げる。定期的に学年会議を持ち、現状と課題を共有し、取り組む。

③活動の方法

- ・園内公開保育及び市の公開保育を行い、多面的に保育を振り返る。
- ・乳児では育児担当制について話し合い、環境設定を行う。
- ・幼児では子どもの興味関心に寄り添い、意欲を大切にできるような環境づくりを行う。

【0歳児】「〇〇さん、ここでみるよ」

周囲の物への興味・関心が「何かな？」と思う気持ちと「触ってみたい」という意欲が芽生え、這う、立つ、歩くなど身体を使って身近な人や物へと関わりをもつようになったことで、少しずつ遊びの場を室内から戸外へと変えていった。最初は園庭の奥にある桜の木の下にゴザを敷き落ち着ける場所を設定した。歩ける子は保育者と手を繋いで歩いたり、歩けない子は散歩カーに乗って散歩をしたりして桜の木の下で過ごした。次第に異年齢児が散歩カーの周りに集まって一緒に押したり、子どもの手を繋いで歩いたりする姿が見られるようになり、子どもからも周囲への関心が少しずつ増え、行動範囲や探索活動の場が広がるようになった。一人一人の成長発達や興味・関心などが違っても、保育者との信頼関係が深くなるほどに安心を感じて、自分からフェンスや遊具の方へ行ったり、自分から声を出して周りにいる保育者へ知らせようとしたりする姿が見られた。

〔反省・評価〕

発達段階に合った遊びをする中で、子どものしぐさや表情から要求やサインを見逃さず一人一人の思いを受け止め、思いを言葉にしたり共感したりしていくこと（人的環境）やしたい遊びを十分に出来る場、安心できる居場所を用意すること（物的環境）が大切である。

【1歳児】「先生何しているのかな。やってみたらできた」

園生活に慣れ戸外遊びの機会が増えてきた頃、2歳児が砂場で遊んでいる姿を見て、砂遊びに興味を持ち始める。しかし、砂に触れたことがなく砂場の周りから立ってみているだけの子どもや砂を口に入れようとする子どももいた。



- ・砂遊びの経験が少ない子どもたちにどのような環境を用意すればいいか探った。

広い砂場では落ち着かなかったり、周囲が気になったりして遊びにくい子どもたちがいた為、小さい砂場を用意した。

ねらい：砂に触れてみようとする。

小さい砂場で数人が保育者と一緒に遊んでいる。その様子を見ているA児。保育者が「砂気持ちいいね」「サラサラだね」と言いながらA児に見えるように砂に触れて楽しく遊んで見せる。A児は保育者の顔や遊ぶ姿を見て真似をしようと近くにあったスコップを持って砂をすくった。その時に保育者の顔を見たA児。目を合わせて「できたね。砂さらさらで気持ちいいね」と微笑みかえした。A児も満足そうな顔をして何度も繰り返し砂をすくって遊ぶ。

〔反省・評価〕

1歳児の子どもにとっては初めて見るものや玩具も多く、保育者が楽しく遊んで見せることで「してみたい・触ってみたい」と興味を持つようになってきた。興味を持った瞬間を見逃さず一緒に遊びながらできたことを認めていくことで、面白さに気付くきっかけとなった。また、落ち着いた場所、玩具の量などを整えていくことで、自我が芽生えてきた子どもたちの「自分でしたい」「やってみたい」という気持ちを満たすことができた。

【2歳児】「今日もボールするんだ」

夏祭りが中止となった為、子どもたちが夏祭りの経験ができるようにと、2歳はボール投げとボーリングのコーナーを設置し、園児のみの夏祭りごっこを開催した。

〔反省評価〕

慣れたリズム室で幼児の保育者にも手伝ってもらい子どもたちは抵抗無く向かうことができたが、ボール投げ・ボーリングのルールを理解しておらず何をしたらいいのかわかっていない子がほとんどで、ゲームを楽しむまで行かず夏祭りの経験まではほど遠いものとなった。各クラスでボール遊びの経験（投げる、転がす、蹴る等）を重ね、ボールの楽しさを味わう必要性を痛感した。



・2歳にあったルール・遊び方・ボール遊びの経験ができる環境を見直す。

ねらい：外で体をつかってしたい遊びをする。

「今日もボールするんだ」と園庭に出る前話すA児。体幹が弱く一段の段差を降りることもとても慎重であったり、遊びが見つけにくかったりするA児であるが、手作りのサッカーゴールを見つけ自分で遊ぶ場所まで運ぼうとする。保育者もボールに興味のありそうな他児を誘い一緒にゴールを運ぶ。自分で納得する場所に運ぶことができ、お気に入りの赤いボールを蹴り始める。「先生、いくで！」と思いつき蹴ったボールを保育者も蹴り返し一緒に走って遊ぶ。



〔反省・評価〕

毎日外遊びを継続し、体を十分動かして遊ぶことを楽しみ自分たちでしたい遊びを見つけられるようになってきた。登園時に園庭のオモチャを見て母親に昨日の話をすることで遊びのイメージを持ち「今日は〇〇したい」と楽しみにする様子が見られるようになった。毎日の繰り返しの中安心して自分でしたい遊びを遊べる環境を充実させてきたことで、子どもが自分で遊び始め、保育者と一緒に準備や片付けもしようとするようになった。

【3歳児】 砂場遊びの環境

新しい環境へと変わったことで落ち着かない姿があった。砂場においては玩具の種類が多く、使い方や片付け方が分からなかったのでじっくり遊ぶ姿が少なかった。また、イメージを膨らませて遊んではいるが定着せず次の日には遊びに繋がらないことが気になっていた。そこで、11月の公開保育をきっかけに職員同士で園庭の使い方や環境の整え方を話し合った。

<6月>

- ・玩具の整理（砂場用具等）
- ・片付ける場所の掲示
- ◎初めての砂場で思い思いに遊んでいた。

<10月～11月>

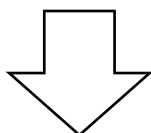
- ・調理器具、秋の自然物をカートに準備
- ◎秋の自然物を使い、キッチンに見立て、それぞれが点在して遊ぶ姿があった。

- ・遊びがみつけれない
- ・玩具が散らばる
- ・遊びが継続しない



<7月～9月>

- ・水遊び用のカート（通常の砂場用玩具と水遊び用の玩具にテープをつけて分ける）、タイヤの準備
- ◎意識して遊ぶようになるが、玩具が混ざり、遊びの場所が定着しない。



公開保育 (11/6) 助言・指導

- 遊びが点在している為、場所の整理が必要。
- 砂場で料理する時は立って料理できるようにしたらいいのではないか。
- 帽子やエプロン等があれば、遊びのイメージが膨らみやすい。

<取り組み>

- ・ビニール袋を使ってエプロンを作成。
 - ・素材や調理器具を同じカートにまとめる。
 - ・立って料理が出来る場所を固定する為にプラスチックケースを並べる。
 - ・食べる場所を一か所にまとめ机・椅子を設置する。
- エプロンがあったことで、イメージが膨らみ遊びが盛り上がった。

[反省・評価]

職員の話し合いをもとに環境を整えたことで安心できる安全な場所で遊べるようになり、一人一人の遊びが深まってはきているように感じる。また、遊ぶ場所を整理したことで自分が使っていた玩具を意識して片付けるようになってきている。しかし、子どもたちが主体的に遊びを深める姿はまだ少ない。子どもたちが興味を持って楽しめる環境を整えるために引き続き職員同士で話し合いを重ね、子どもたちの様子を見ながらその都度必要な物を準備する必要がある。

【4歳児】「今日はなにをして遊ぶボード」

4月 園庭が広くなるという変化に伴い、3歳の時の姿とは違い走り回っている子が多くなっていった。‘‘〇〇をして遊びたい’’というめあてを持って欲しい、したい遊びを繰り返し続いで欲しいという思いから、そのためにはどう関わっていけばいいのかを考えていった。



6月 園庭で遊んでいることを絵にかいた「今日はなにをして遊ぶボード」を部屋の入口に置いたり、園庭図がかいてあるボードを振り返りの際に活用したりした。ボードを使うことで「今日は何して遊ぶかな」という意識が出て、それまでよりも遊びが続く姿が見られた。



9月 ある日、ボードを見ていた子どもが、「いつも作る水流すコースの写真を撮ってほしい。忘れてしまうから、また作れるようにしたい」と言ってきた。そこでボードに写真を貼り、自分のマークの磁石を用意して、園庭に出る前にどこで遊ぶかを選択できるようにしたところ、より自分でしたいことを見つけて遊びに取り組む姿があった。また、「〇〇ちゃんは何をするの?」「一緒にしようよ」と誘うなど友達との関わりも見られるようになった。話し合いを重ね、子どもたちの様子を見ながらその都度必要な物を準備する必要がある。

[反省・評価]

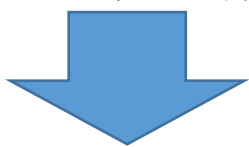
ボードに遊んでいる様子の写真を貼り掲示したことで、その場にいなかった子や振り返りの言葉だけではイメージしにくい子にも友達のしている遊びが分かりやすく、「自分もやってみたい」という意欲につながった。また、園庭に出る前にボードを見て遊びを自分で選択することで、めあてを持ちにくい子にとってしたい遊びを見つけるきっかけになった。

そして、遊びの中で、必要なものを子ども同士で話し合い、遊びながら空間を作っていくことを楽しみ、次の日にも遊びが継続していくことを感じた。その姿から、子どもが興味・関心を持っていることに目を向け、試したいと思ったときにすぐ手に取れる物的環境づくりが重要であると感じた。そして1番大切なのは、保育者や友達と一緒に遊ぶ中でたのしさやおもしろさを共感するという人的環境であり、心が満たされることで子どもはより遊びに夢中になることを改めて感じた。

【5歳児】「チャレンジタイム・チャレンジカード」

〈園庭図を取り入れた振り返り〉

友達と遊ぶことを喜ぶがじっくり遊ぶことができにくい幼児がいた。そこで、園庭図を使って遊びの振り返りをし、友達がしていることを視覚から捉えられるような環境で、遊びが広がるようにしてきた。振り返りをする時に、視覚的環境を使うことで、友達がどのような遊びをどこで展開しているかが分かり、何をして遊びたいかが明確になった。また、サーキットや鬼ごっこなど、どの空間で遊べば良いかを考えるきっかけにもなった。



物的環境があることで見通しを持って遊ぶ姿があった。

〈チャレンジタイム・チャレンジカード〉

自ら遊ぶ姿は育ってきたが遊びに偏りが見られたので、いろいろなことをやってみようという気持ちが育つようチャレンジカードを取り入れ縄跳びや鉄棒、ボール遊びにも挑戦する機会をつくった。チャレンジする項目が明確にあることで目的を持って遊ぶ姿が見られ、できた時は「やったー、これできたで」とスタンプが増えることに喜びを感じていた。遊びの振り返りで友達に知らせると他の子も刺激を受けて挑戦してみようとする気持ちに繋がった。また、チャレンジタイムとして全員で取り組める機会を作ったことで、カードに興味を持ちにくい子や声をかけても挑戦しようとしなかった子も物的環境があることで自ら遊びに取り入れるようになった。



〔反省・評価〕

チャレンジカードを取り入れたことで、目的を持って遊ぶことに繋がり、そうした取り組みによって達成感や満足感を味わいながら継続して遊ぶようになってきた。カードに書いていない新しい技に挑戦しようとしたり、自分で考えたりしてカードに書き込む姿もあった。また、目的を達成できない時は友達と悔しい気持ちを共感し、やり方を知らせるなど相手を励まし応援したりする姿が見られた。保育者や友達に認められることを喜び、自信をもって取り組むことで、忍耐力や自尊心、非認知的能力が育つきっかけとなった。

5. 研究の成果

- ・子どもの発達を見取り保育の評価を行うことで職員一人一人が意欲を高め、連携して保育できることをねらいとして、定期的（計画的）に園内公開保育及び市の公開保育を行ってきた。
- ・乳児では、育児担当制について何度も話し合い「信頼できる保育者の下、安定した生活リズムを保証すること」を確認し合い、環境づくりを進めてきた。
- ・幼児では、年齢に必要な遊びを探求し保育しているが、園庭環境に目を向け保育を語り合うことで、自ら意欲的に遊ぶためにはどうすればよいかを考える機会となった。
- ・公開保育や事例からの学びとしては、保育を見、子どもの姿を中心に語り合うことで、0歳から5歳、及び就学までの子どもの発達を捉え、必要な保育内容を考え合えた。分園であるため、乳児棟の2歳児が発達を超えた保育になりがちであることを常に考えていく必要があることを確認し、乳児棟から幼児棟への接続も踏まえて乳児の感性豊かな土台の上に、幼児の自主的な遊びについて探求できた。

6. 今後の課題

- ・研修を行う中で保育について語り合うが、職員が多い為全員での共通理解が難しい。すべての年齢において乳児・幼児と保育者との関わりが重要で、継続して研修を行いできるだけ多くの職員が研修に参加し、伝え合う方法を探り、日々の実践につなげていきたい。
- ・学んだことを日々の実践につなげていくためにも、更に職員間で連携をとり、物的環境や人的環境を整えていきたい。